SDGs 学んでみたら「自分ごと」

「健康って？」「平等って？」授業で標語作り

来春から中学で始まる新しい学習指導要領では、「持続可能な社会の創り手」の育成が強調されています。一足先に取り組む学校では、国連の持続可能な開発目標（SDGs）を採り入れ、世界と「今の自分」をつなげて考えるきっかけを作っています。

中3で採り入れ

東京都渋谷区の青山学院中等部。23人が受講する3年生の選択授業「ソーシャルイノベーション入門」では9月、SDGsの17目標ごとに設定されているターゲット（小目標）をわかりやすく伝えるためのコピー（標語）づくりに、2回にわたって取り組んだ。

ターゲットは全部で169あるが、初回は「すべての人に健康と福祉を」という目標3の第8ターゲット「質の高い必須の保健サービスや安価な医薬品、ワクチンへのアクセス」（3・8）を取り上げた。

4班に分かれ、まずはそれぞれが調べてきたことを発表しあった。国民皆保険は海外では普通ではない。盲腸の手術費用の日米比較を調べてきた人もいた。「お金がないと受診できないというのは、おかしくない？」。ターゲットについての理解が進んだ。

その後は、いよいよ独自のコピーづくり。「健康って何？」「元気ということでは」。詰めて考える必要に迫られるたび、話が盛り上がった。

授業は2時間続きだが、あっという間に発表の時間に。注目を集めたのは「空気のように広がる健康」というアイデア。万人共通との思いを込めて『空気』とし、普及への思いを「広がる」と表現していた。

2回目の授業では、班ごとに違うターゲットに取り組んだ。「政治や経済などの意思決定に女性を増やし、平等なリーダーシップの機会を確保する」（5・5）について考えた3班は、「性別を問わず、未来を描ける世界へ！」というコピーをつくった。

男女のくくりでは性的少数者が含まれないので、「性別を問わず」とした。平等とは何かと考えるなかで「同じ景色を見られる」という意見も出た。最終的にはリーダーシップの要素を考え、「未来を描ける」に落ち着いた。

授業後、新井理紗子さん（14）は「ターゲットには格差やジェンダーなど違和感を感じていた問題が提起されていて、納得した」と話した。小池健心さん（15）は「自分たちにできることも多いと思う」。

担当する社会科の三好文子先生は「平易な言葉を考えることで、課題の根っこの部分に近づけた。行動に結びつけたいという感想が多かったので、一歩踏み出せるような学びを重ねていきたい」と話す。

公立校でも模索

公立校でも模索が始まっている。千葉県八街市の八街南中学校は、SDGsの視点から世界と地域を考え、身近な行動に移すことを目標に動き出したところだ。総合的な学習の時間などで「知る」「調べる」「実践する」「まとめる」の順で進め、委員会の活動にも採り入れるという。

1年生の担任で音楽科の筒井美穂先生は「合唱曲にも環境のテーマが増えている。生徒にはSDGsは身近なはず」と、以前からクラスで話題にしてきた。兄から「女だから家事を手伝え」と言われる生徒は、ジェンダー問題をノートにぎっしり調べてきた。

クラスの生徒が好きな目標にシールを貼った教室の壁の掲示を見ながら、「このままだと地球はまずいよね」と話す姿も見られるように。これから会話がどう膨らんでいくか、楽しみにしている。

SDGsを活用した授業を提案する元小学校長の手島利夫さんは、「従来型の詰め込み教育では持続可能な社会の創り手は養成できない。間口が広く興味のあることを見つけやすいSDGsで学びの火がつくきっかけを作ることは、答えのない問題を考える力につながる」と話す。

◇

朝日新聞社は「SDGs169ターゲットアイコン日本版制作プロジェクト」に協力しています。子どもや学生が応募でき、締め切りは11月30日。詳しくはasahi.com/ads/sdgs169/。

（編集委員・北郷美由紀）

上SDGsのターゲットをわかりやすくするコピーづくりに取りくんだ生徒たち＝東京都渋谷区の青山学院中等部
下配膳室前の食品ロスについての展示＝千葉県八街市の八街南中、同校提供

2020/10/26　朝日新聞朝刊19ページ　東京本社
©朝日新聞社　無断複製転載を禁じます
承諾番号　20-4025